# 好い加減 ～思い出の一コマ～

年度末から新年度に掛けて、甚だ肩の凝る事務作業がある。宗教法人の税務に関する書類をしっかりと調えなければならないのだ。避けては通れない、これは義務である。

覚えてしまえば然程複雑でもないのだろうが私は新米の住職、さらに昨年の事はうろ覚え。いざ取り掛かれば、数字や堅苦しい文字の羅列に肩が凝り始める。

この様な切羽詰まった状況に陥ると、決まって思い出す言葉がある。「好い加減」という言葉だ。

今から四半世紀程も前の話である。当時の私は大好きであった画家の山下清をモデルにしたドラマ「裸の大将」に憧れを抱き、短期間ではあったがよく放浪の旅に出ていた。目的を問われても思い出せないのだが、その時の私は父方の故郷でもある九州・長崎県の片田舎をうろうろとしていた。季節は肌寒さが残る、春先であった。

当てもなく歩きながら、その日の宿を探していた時である。とある畑の一画を鍬で耕す老婦人の姿を見つけた私は早足で駆け寄り、「今晩、泊めてください！お手伝いから何から何でもします！」と声を掛けたのであった。

手拭いを頭にかぶった老婦人は、リュックサックを背負って一人佇む私の全身をまじまじと見て「よかよ、ついてこんね」と一言だけ口にして手に持っていた鍬を置き、自宅の方へと歩き出した。

一旦、自宅へと戻った老婦人は、お茶とお菓子（干し柿）、農作業に適した服まで用意してくれた。着替えを済ませた私は、老婦人と共に畑へと向かった。

畑に着くと老婦人と私で列をなし、鍬で耕しながら後ろへと進んでいく。しばらく経って、隣を見ると老婦人がいない。見回すと私より後ろにいる。私はさらに鍬を振るう手に力を込めた。

一通りの作業を終えて休憩となり、疲労困憊で息を切らして汗だくの私と涼しい顔をして微笑む老婦人。この対照的な光景に、何かを察したのか老婦人が口を開いた。「あんたさんは、（鍬を）上げる時も下げる時も力一杯やろ。上げる時は上がるだけの力、下げる時は力入れんでも下がるけ、最後にちょっと力入れるだけでよか。好い加減でよかと」。

続けて、「一生懸命」と「一所懸命」の違いを途中聞き取れない方言を交えて話してくれた。要は、「一生懸命」はいつも全力を注ぎ込むから疲れる、「一所懸命」は一所だけに力を入れるだけであるからそのコツを学びなさい。ただしそのコツは全力で物事に取り組まないと学べない、という内容であったと解釈している。

この青年期の出来事は今も心にしっかりと刻まれて人生の教訓になっている。

肩が凝るということは、どこか余計な力が加わっているか、力を逃す機会を失っているということである。

さ、一休み。腕をぶんぶんと振りながら、散歩にでも出掛けますか。

やっさん